現代社会の問題解決学としての生活学とは何か

千里金蘭大学短期大学部　三石博行

はじめに

- 生活学は、時代と文化に規定された生活空間の改善や問題を解決する学問として形成されてきた。人間活動（経済や政治を含め国民生活のための活動）の結果が、地球規模の生態系への影響や資源の枯渇問題を引き起こしている現在、もう一度、生活向上を生産条件の向上として考えてきた文明パラダイムを点検し、生存条件のあり方を検討する時代が登場しようとしている。この論旨では、生活学の科学性は時代と文化に規定された学問であることと、生活学の方法論は問題解決を目的とする学際的学問（アカデミックプラグマティズム）であることの二つの特徴を述べる。
- 生活学分野の人々が生活学の学問のあり方を問いかけている時、他の学問分野で、生活世界への関心が高まりつつある。他の分野での生活学化の流れは、生活学のあり方を考えるための参考になる。つまり、これから生活学は、他の学問分野との学際的な研究を提案できる条件が整いつつある。生活学のあり方を問う作業の中で、その新しい学問的な地平の意味を理解する必要がある。
- そして、学際的生活学の試みから、新たな科学論が生み出される。その科学論をこれまでプログラム科学論と呼んできた。この論旨では、生活資源の要素分析、そこから解釈されるプログラム構成要素、そしてそれらの学方法論や科学認識論から、問題解決を課題にする学際的生活学の展開によって、プログラム科学論が検証されるのであることを提案する。

法則科学と問題解決学、（生活学の科学性を理解するために）

法則科学の行為の概念（絶対理性に即した行為としての実践）

- 近年、人間社会学の中で、「問題解決学」という新語が登場している。しかし問題解決学は成立していない。科学方法論として提案されているのである。「問題解決学」は、伝統的な「認識科学」への批判概念を含む科学方法論として用いられている。
- 法則の発見を目的とする物理学は、「宇宙法則の認識」を目的とした学問である。宇宙から素粒子までの物質世界の法則を発見することが、理論物理学や理論化学の関心である。宇宙や物質の存在やその運動についての法則を解き明かし、世界のあり方を認識することは、先天的実在のあり方を知ることであると理解されている。客観的な存在に関する認識、つまり、天体運動や地球上の物理運動の基本法則を解明することは、それを支配した神の摂理を認識することであった。17世紀の近代科学は、絶対的な理性のあり方を説明する方法であった。しかも、その知は、「知は力なり」という表現によって示されように、応用可能で有用な知、実践的な知であった。17世紀の近代合理主義の科学思想に流れている知と実践との不可分性の考え方は、その後の啓蒙主義や科学主義に受け継がれ、産業革命を導く科学や技術を生み出すことになる。
- 西洋近代以後の科学史研究から、科学の発展と技術の発展は不可分の関係にあることが理解されている。新しい科学が新しい技術を生み出し、またその逆に新しい技術から新しい科学が萌芽していくのである。つまり、科学と技術は相互依存しながら発展して来た。法則に関する「認識科学」には、つねにその証明問題のように、実践の課題が問われ、また実践的な技術には、その理性的な形態の認識の課題が提案されるのである。近代思想に於ける、最高の実践とは、絶対理性的な法則に即した行為である。神の摂理（絶対的な理性）もしくは自然の法則に従い行う行為によって、正しく有効な行為

の結果（帰結）が生み出されると信じられている。絶対的な理性の存在とそれに従う行為を有効で現実的な行為であるという実践哲学が、近代合理主義、またはそれを継承している西洋哲学の中に流れる。今日の法則科学を前提にした行為論は、その系統を引き継いでいると言える。

- 「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」というヘーゲル哲学のテーゼは、近代科学に於ける理論と実践の両立関係を、存在論的な領域まで推し進めても、その両立関係は成立し続けるというドグマを表現したものである。この哲学的な帰結によって、近代合理主義が要求した「理論的なものは実践的であり、実践的なものは理論的である」という合理主義科学理論が、世界存在のあり方を示す公理として確立したのである。

問題解決学における解釈の概念（現実解釈のモデル）

- 問題解決学は、純粋に学問的な概念の構築を目的としない。それは、現実社会で生じている課題を解決するために既成の学問領域を超えて、学際的な方法を取り、より有効な解決の糸口を提案することを目的としている。つまり、問題に対して有効な解決方法や技術を持つ分野間の研究交流を展開しながら、逆に新しい学問を構築して行く方法を持つ学問を問題解決学と呼んでいる。
- 問題解決の作業は政策とも言われる。つまり、これまで問題を解決する政策が課題になり、その政策を見出す学問を政策学と呼んだ。現実の人間社会の課題に答えを出すために研究を進める学問である政策学ではなく、敢えて問題解決学と言う理由は、幾つか挙げられる。その一つは、伝統的な政策学は、ある分野の学問的視点から問題解決を行う方法を取ってきた。例えば経済学の立場に立てば、古典派経済学や近代経済学も経済政策を導くための学問である。また具体的な行政の課題を検討する政治学の立場に立て考えれば、行政政策に関する政治学という分野になる。
- しかし、問題解決学は、一分野の学問領域に拘らないで、問題を解決するために他の分野の学問領域から有効な手段を取り入れていることである。また、二つ目の理由は、政策学は一般に社会科学の分野に限定した学問、例えば経済学、経営学、政治学、法学などを基盤にするが、問題解決学は、社会科学的な政策を課題にしているばかりでなく、技術的な解決、人間学的な解決、工学、農学や医学的な解決まで含む意味を持っている。
- さらに、科学性の視点に目を付けて、政策学と問題解決学との違いを比較すると、そこに学問に対する認識の食い違いを見つけ出すことが出来る。伝統的な政策学では、学問の理論的実践課題として政策が導かれると考えるのに対して、問題解決学では、学問は、問題を解決するための「道具」であると理解されている。言い換えれば、問題解決学では、より有効な道具を見つけ出すことが学問形成の条件として理解されている。その科学精神は問題に対するより有効な答えへの評価によって成立している。しかし、伝統的な政策学では、伝統的な学問理論に対する評価を前提条件にした、有効な政策の評価が問題になる。
- つまり、一方（問題解決学）が学問形成を知の集合内での評価関数の再配列作業として理解しているのに対して、他方（伝統的政策学）は、学問的体系内での証明問題として理解される。問題解決学には、あらかじめ約束された解を導く公理は存在しないが、政策学は、その解を導く公理系を前提としている。単純に、一方を有効的な知の集計の帰納的解釈と言い、他方を有効な公理系の演繹的展開の仕方と言うことはできないが、明らかに、その二つの間には、学問精神もしくは科学哲学の違いがあることが認められる。
- 伝統的な政策学では、あらたに有効な知を新理論と言うが、問題解決学ではそれらの有効な知を新モデルと言う。つまり、一方は知の体系から導き出された新しい知で、それはその知の体系の中で証明可能であることが条件となる。しかし他方は、有効性が前提になり、その有効範囲の限定条件をもっ

た解釈としての新しい知である。

法則科学としての近代社会科学の形成

- 伝統的な政策学と今日謂われる問題解決学に於ける学問的方法の違いは、伝統的な近代科学の歴史の中で生み出されたものである。近代科学の形成史から若干の分析を進めると、自然を対象にした科学ばかりでなく人文社会系の科学も社会法則に関する認識科学の立場を取って発展して来た。物理学や化学を典型とする法則を見出す科学では、法則科学と呼ばれても当然な背景を持つと理解されるが、社会文化を対象とした科学、人文科学もそれらの法則科学の影響を受けて歴史的に形成され、発展して来たのである。
- デカルトやニュートンを例にとるまでもなく、17世紀の近代科学は、キリスト教神学の一部である物理神学（physico-theology）の伝統的な系譜を引き継ぎ、神の存在証明の一貫として、神の言葉によって書かれている自然の秩序（法則）を認識するための探求であった。従って、法則性が存在しているという思想の背景には、「神は偶然のことばで世界を書くことはない」というユダヤ・キリスト教一神論的な信仰があった。
- 神の秩序に支配されているのは自然現象のみではない。人間社会の現象も「見えざる神の手」によって生み出された産物であると解釈されていた。神の決めた社会や歴史現象を司る規則（法則）を理解するために近代社会科学が形成される。モンテスキューに始まる18世紀の啓蒙主義、その精神を受け継いだアダム・スミスに始まる18世紀後半から19世紀の古典派経済学（その名づけ親であるカール・マルクス）に至るまで、社会科学は、社会変革の知は、社会現象の法則を認識するという精神に基づき発展してきた。つまり社会現象を、19世紀初頭までに発展した物理学や生物学の視点に立って展開する現代社会科学の基礎的な理論、例えば進化論を社会発展の解釈理論に取り入れてスペンサーの進化社会学が形成されたように、法則科学の科学精神の上に近代（現代）社会科学は生み出されたのである。
- 近代合理主義精神が、近代科学を発展させ、理論体系を構築し、生産力を増大させ、有効なシステムを構築する現代科学技術を生み出してきたのである。正しい社会実践は正しい世界認識から導かれるとする理論と実践の両立を唱え近代合理主義の精神の上に成り立つ科学理論によって、これまでの科学や技術は発展し、人類に巨大な生産力を与え、その富の上に自由と平等の社会（資本主義社会）を創りだすことに成功したのである。この成功こそが、科学技術の進歩によってのみ、社会的富や人間的幸福が形成されると信じた科学主義の土台を作ったのである。

問題解決学のモデル（限定条件付の理論説明）

- 近代科学とその思想を生み出したデカルトは、それらの科学の到達立点を［知恵の樹］という概念で表現した。「知恵の樹」の科学思想から考えると、認識科学から導き出される生活世界の科学は、基礎的な知識の形成の上に、生活世界の科学が成立することになる。基礎科学があってその上に応用科学があるという常識は歴史的にこうして形成された。デカルトによる基礎科学とは、哲学、数学であり、その上に人間学（医学）や自然学（物理学）が存在する。今日、基礎科学を理学と呼び、応用科学を工学、医学、農学等々と呼んでいる。それらの基礎科学を土台にして、生活世界の科学（人間の幸福に直接役立つ科学）が開花するとデカルトは予言した。実際、この17世紀のこの予言に即して、現代の科学技術文明は形成されたのである。
- このデカルトの「知恵の樹」の考えに従って、現代の生活科学も発展して来た。例えば、食生活を豊かにするために、栄養学や食品学が発展し、それらの学問は有機化学や生物化学の発展（化学の発展）

に支えられ、その食材の栄養分析がより正確により精密になることによって、食生活の理解は深まる。また、食生活の安全や合理的な栄養摂取に関する知識も生理学の進歩によって代謝経路の理解と共に進歩してきたと考えられてきた。

- 食の安全は、新しい合成化学物質によって今までになく保障され、食材は、新しい農業技術によって四季に関係なく供給され、また運輸技術によって世界中から運ばれてくる。食文化は科学技術の進歩によって、近年、革命的な変化を遂げた。その土台に自然科学、認識科学の進歩があり、その進歩に支えられ発展してきた法則科学としての生活科学がある。
- 例えば、食の安全に関する問題解決学とは、栄養学や食品学の視点のみでなく、食材を生産する生態環境や生産する農業生産方法、食品流通や食生活スタイルや食文化に至るまで、食の安全に関して考えられる全ての分野から、食の安全に関する知識、方法や技術を見つけ出そうとする。
- それらの知識や技術は、問題を解決するための文化的な時代的な限定条件を持つ。限定条件内の課題解決にたいする回答（方法や技術）が提案される。その回答を理論とは言わないで、モデルと呼んでいる。つまり、問題解決のモデルの提案、そのモデルを見つけ、設計することが問題解決学の「理論」作業となり、モデルを現実の社会に適応して答えを引き出す作業を技術と呼んでいる。モデルの作成とその実証を進める技術が問題解決学の方法論である。
- 科学的には具体的に解決可能なモデルの有効範囲を見出し、そのモデルの初期条件と有効性の境界条件を明確にしながら、より汎用性の高いモデルを構築する作業を続ける事になる。そのモデルの有効性を拡大する作業の中で、問題解決学の科学理論が構築されると考えるのである。つまり、理論は帰納的に導き出され、現実的解決能力によって検証され、検証された知の集合関数によって科学理論的な評価が行われる。問題解決学での理論は、限定条件付の理論説明であると言える。
- プラグマティズム的理論形成の考え方に立つ問題解決学の学問は、デカルトの「知恵の樹」の概念を逆さまにし、まず生活世界の問題を解決するのに有効な知恵が知恵の樹の根元を形成する。例えば、図1の「問題解決学から帰結される科学論の形成過程のモデル」で示すように、生活を営むためのあらゆる技能、文化的知識、工学、農学、医学、心理学、経済学、社会学、言語学、倫理学等々がその知恵の樹の土台を形成し、その土台から延びた幹は、それらの問題解決のために学際的な分野から構成された学問の方法論、つまり問題解決学の方法論や科学理論がある。そして、その科学理論を構成する科学論がその上に、開花することになる。

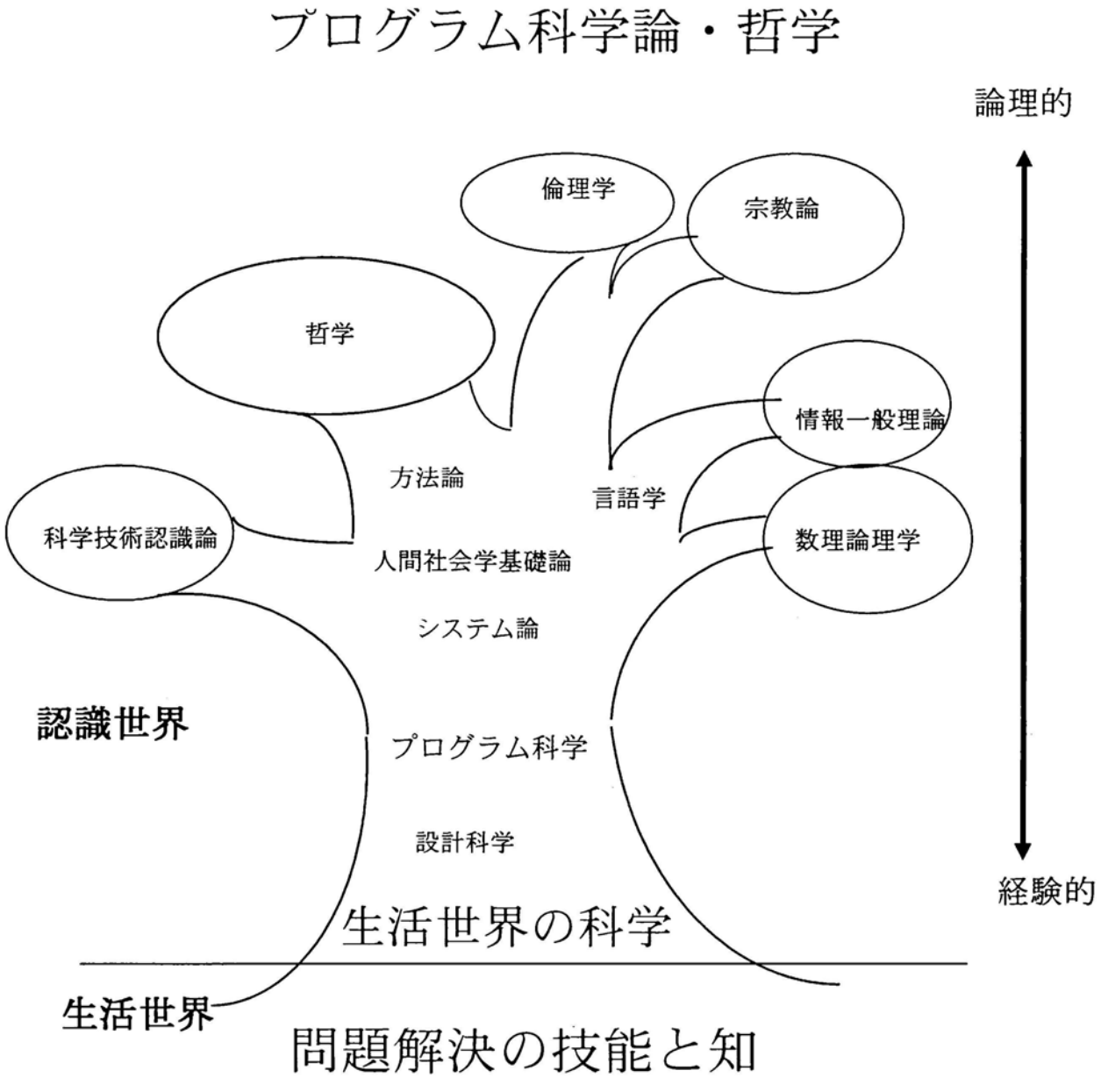
問題解決学としての生活学

- 今和次郎は、20世紀前半、東北大冷害を契機に生活学を提案し、関東大震災の復興活動を通じて考現学を考案した。その意味で、生活学は、現実の生活問題の解決学と言える。この生活世界の問題解決学は、一般に、これまで政策学という名称でよばれた学問と違い、問題解決が政治経済の課題の解決ではなく、社会文化もしくは地域共同体や集団の問題解決を含んでいる。その方法は、マクロ経済学や政治学的に問題を解決する方法ではなく、ミクロ分析、ケーススタディという方法を用いる。調査データを処理することによって、問題点を取り出す方法を取る。今和次郎の行った統計的方法は、生活空間の調査や分析の手段となり、それに基づく分析から生活病理の問題解決のための提案を行っている。
- 問題解決学の概念を明らかにするために、京都の街づくりや産業の発展を課題にして、京都で取り組まれている「京都学、Kyoto Studies 」を例に取る。「京都学」とは、現実の京都の地域社会・町に蓄積されている文化・技術、その生活・産業のあり方に関する研究を意味する。京都という特殊な地域で、その文化が持つ、伝統と近代、伝統技術と先端的技術、伝統産業と先端産業、伝統文化の維持

と近代的生活などの諸関係を明らかにしていくことが課題となる。この課題は、生活学の課題であると言える。

- 日本の家政学（生活学）は、19世紀のアメリカのコーネル大学で形成されたヒューマンエコロジーの精神を継承している。アメリカのアカデミックなプラグマチィズムを起源とする実学として、家政学は生み出されたのであるが、その科学に象徴されるように、純粋に学問的な概念構築を行うことを目的にせず、問題解決のための正しい政策を導く技能や知識を家政学として収集した。つまり、問題解決学の科学性は、日常的で実践的な応用問題によって知の合理性が試される。
- また、問題解決のために、既存の学問で実証された理論を全て動員することが出来る。これまでの生活学を見る限り、生活の改善を試みるために、人間社会学、工学、医学、農学、薬学、経済学、文化人類学、美学、体育学、心理学、哲学・倫理学をはじめ、民間療法や漢方医学など、古くから受け継がれてきた知識や技能を援用しながら、この学問は発展してきた。
- 生活学は、その発生から形成に至るまで、学際的で実践的な知識の集合の中で発展して来た学問である。つまり、純粋な学問的公理体系の確立を課題にするのではなく、唯一、生活病理の臨床の知としての有効性のみを問い掛け、その課題の解決に寄与する知を拾い出し、有効な知のみが問題解決学の知のデータベースに登録される。そしてそれらの収集された知の集合要素を再配列する中から、例えば、今和次郎が創作した記号―統計分析を用いて生活空間を解釈する生活学、考現学、生活構造、生活病理などの概念のように、新たなモデルを提案したのである。つまり、問題解決学の科学があるとすれば、その代表が生活学であると言える。
- 生活学は、生活資源に関する改良の科学、生活実践の知の有効性と解決能力の評価によって淘汰された知の集積によって形成され続けられてきた科学である。その合理性は解決能力によって判断されてきた。現実的な知と技能の知の集合体である。その知の集合体は、生活改善のための有効な概念やモデルの提案によって展開してきた。それらのモデルの提案は、生活改善を進める生活主体の生活思想によって導かれている。
- つまり、生活主体が持つ生活設計の企画や仮説に即した知の配列が要求されるのである。その意味で、生活学は設計科学の一分野であると言える。生活学は生活主体が意図する生活改善の価値観を前提にして成り立ち、展開する学問、「生活世界の設計学」と呼ぶことが出来る。そのメタモデルとして、生活思想があり、それが具体的な設計構想を導き出している。言い換えれば、生活学と生活思想は不可分の関係にあり、その思想の具現化として生活学が展開する。生活設計思想と設計技能や設計理論は不可分の関係にあると言える。生活学は、そのメタレベルの生活思想と深く結びつき、そしてその哲学によって展開する科学性を持つと言える。

図1、問題解決学から帰納される科学論の形成過程のモデル



生活病理とその対策

現代日本の生活学の課題と対策方法

- 生活病理の理解とその対策を考えるとき、現代の生活文化を支え進化させている文明パラダイムの構造、科学技術文明を理解しておかなければならない。この文明の観念形態の基本構造（イデオロギー）を解釈する科学が人文科学である。人文科学（人間社会学）の課題に一つに生活学がある。生活学は、生活文化、生活構造、生活経営、生活様式、生活素材、生活環境などの課題を取り上げる学問と技術である。
- 生活文化や生活構造は、その生活を取り巻く地理的、気候的、生態的環境やその生活を形成してきた歴史的、文化的環境によって異なる。例えば、生活様式は先進国と発展途上国では異なる。また、生

活素材の種類はアジアとヨーロッパでは異なるし、日本と韓国でも食生活、衣生活や住生活はもとより生活様式も異なる。つまり、日本社会の生活学と他の文化圏や他国の生活学とは異なる生活素材や生活様式を対象として研究される。その意味で、異なる文化に於いては異なる生活学が形成されると言える。

- また生活学は、生活学を研究する生活主体を取り巻く生活資源、生活文化、生活構造を論じる学問である。それは生活主体の生活条件の向上や改善を課題にした学問である。生活学は生活学を取り組む人々の生活空間に関する問題解決学である。つまり、生活学について論じるとき、「現在の我々日本での生活病理に対する解明とその対策の学問」という限定条件が付くことになる。
- その限定条件にたって生活学の時代と現代日本社会での生活病理の原因を考えると、主に二つ原因を挙げることが出来る。一つ目は、日本的な伝統文化や伝統社会が新たな近代的欧米社会文化のシステムに変換される過程の中で生じている課題である。二つ目は、一つ目の課題の基本的な要因になる科学技術を社会文化の基本とする構造から生じる課題である。この二つの原因から生じている現代の生活病理の姿について調査し、その構造を明らかにすることが我々の生活学の課題になる。
- 生活文化や生活環境の「貧困」構造を明らかにするために学問的方法は、19世紀からのアメリカの人間生態学・家政学や、また20世紀の今和次郎の生活学でも生活文化や生活環境の調査方法や時代の人間社会学の科学的方法を援用して発展してきた。その代表例がケーススタディでの記号分析、集団的な行為や生活様式の統計分析が用いられる。つまり、科学方法は、時代的に有効とされてきた人間社会学の方法を活用してきた。
- 日本での生活学の科学理論の展開に時代的な人間社会学の有効な理論を援用しながら発展してきている。例えば、今和次郎の民俗学（文化人類学）的な方法を活用し、篭山京の生活構造論に見られる生命経済学的な方法論を援用し、青井和夫らの機能主義的社会システム論的な方法論を使い、また吉田民人のポスト構造主義的なシステム論的展開（自己組織系を示唆する）を用いて、その時代の生活構造や文化の分析を試みているのである。しかし、それらの理論も、その前提条件の中にあり、時代的に有効な理論であると言える。
- 例えば、生活構造論の形成から消滅までの学問の歴史を振り返ると、生活学では、その理論は時代精神によって生まれ、その有効性は時代的課題に対して限定的に適用される条件で成立していることが理解できる。戦時中や戦後まもない時代の生活課題は経済的貧困である。経済的に豊かな生活を求めている時代の生活改善のための問題解決学であった。その問題解決の課題が薄らいでいく60年代後半からの日本社会では、生活構造論の必要性は次第に薄れていくのである。つまり、貧困からの解決という問題解決の時代的社会的要請が消滅していくと同時に、篭山京や青井和夫らの生活構造論はその任務を終えるのである。
- また、その課題は、今和次郎の生活学にも言える。彼の定義した生活病理は、封建的な農村社会に起因すると考え、その構造を分析する。生活病理の概念自体は現在でも活用できるのだが、その内容に関しては今和次郎の時代と現代の生活文化や生活環境が違う以上、同じではない。
- 言い換えれば、生活学は、時代の有効な知を活用し、問題を解決し続けてきた学問である。過去の科学的方法論を継承する理由は、それが現在、分析の道具として有効であるという条件以外にない。過去の知識の体系的な蓄積の上に整然として成り立つ学問ではない。現代の生活病理への対策の学として、現代のあらゆる分野の科学や技術の知を援用し、生活学を提案することができる。

都市生活構造論の課題の例

- 都市生活環境から来る地域社会や共同体の不在によって、老人の孤独死、育児支援不在、子育て不可

能な社会、出生率の低下、犯罪の増加、等々の生活条件に直接影響を与えている地域社会の問題が生じている。また、伝統的な家族が崩壊することによって、家庭内暴力、虐待、離婚などの問題が生じている。そうした家族環境の変化、家庭教育の不在などの影響を受ける事で、学校教育も崩壊しようとしている。クラス崩壊やいじめ、非行、麻薬中毒、援助交際などの犯罪が多発しつつある。

- 都市生活空間の激変、伝統的な生活風景が壊れ、近代的な建築様式が導入されることによって古く不便な住生活空間が改善したのだが、その反面、町の景観はごみごみとし、統一の取れない町並みが作られ、伝統的で歴史的な建物の横に、まったく相容れない建築物が立ち並び、そのちぐはぐな町の風景が、どのように我々の精神生活に影響を与えているかと考えた事があるのだろうか。
- ヨーロッパの社会では、こうした建造物の文化的混乱を避けるために、長い歴史を通じて、都市計画が実行されてきた。それは町並みの保全という問題ではなく、景観が与えるこころへの影響、精神構造の外化としての文化のあり方への深い理解に立っていると考えられる。フランスに於いても、19世紀プロシアのビスマルクが制定した法律が継承され、歴史的建造物の500メートル以内に新しい建物を立てることが禁止されている。この法律のために、伝統的建物を保存し、その内部を改良するための技術が必要になり、そしてそれを政府や地方自治体は補助しなければならいのであるが、結果的には、そのことによって、美しい町並みが保存されてきた。
- しかし、わが国は、建築家にとっては絶好の実験場のようなものかもしれないが、統一性のない町並みに変化してきた歴史が、華やかな科学技術の進歩を可能にした近代日本の結果としてあることを忘れてはならない。その生活文化へのインパクト、精神生活へのインパクトを考慮する、生活学の探求課題が必要である。
- 都市の街づくりに関する分野の学問は、建築構造物や社会下部構造を考える工学分野、例えば都市工学、社会基礎工学（土木工学）建築学がある。これらの工学分野と連携しながら、都市生活空間の設計を考えることが出来る。また、都市生活のあり方を考えるとき、都市社会の経済社会システムに関する社会科学の分野、例えば都市社会学、地域社会学、開発社会学が挙げられる。地域社会環境は生活空間を決定している。また、生活環境の改善は開発社会学的な視点でマクロに展開される。社会学的な視点で、都市生活の社会構造を考えることが出来る。
- 東京都立短期大学の都市生活学科では都市生活学を専門的な教育課題に取り上げている。この学科では、「都市における生活のありかたを多角的にとらえる」ことを教育目的としている。都市生活学科のカリキュラムは「都市生活の基礎」と「都市生活の問題」を専門基礎科目群の課題とし、「人間と福祉」、「家族と地域社会」、「消費科学」、「都市での心理と行動」、「都市生活と居住空間」と「都市生活とデザイン」の6分野で、都市生活学科の教育課題を示している（[1]）。特に、「都市での心理と行動」分野のカリキュラム群で、「余暇論・レジャー論」、「社会心理学」や「環境心理学」の科目があり、都市生活者の「精神保健」（この科目もあるのだが）に関する課題を取り上げている。この生活学分野での都市生活学の専門教育は、都市生活の病理環境を解決する社会文化的な土台を構築していくと期待できる。
- 都市生活に関する課題を全て挙げるとなると、表1に示すように、生活課題を取り上げている科学技術分野と生活課題から考えられる一覧表が出来る。

表1、都市生活学の課題例

都市生活	ライフスタイル	心理	経済	法律	工学	政治	情報	健康	環境	交通	文化	福祉	娯楽	教育	美学	・	・
衣	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	・	・		・	・	・	・	An
食	B1	・															
住	C1		・							・							
家族	D1			・							・						
地域社会	E1				・							・					
こども	F1					・							・				
高齢者	G!						・							・			
障害者	H1							・							・		
安全、災害	I1								・							・	
・																	・

生活情報論の課題の例

- 近年で急激に進歩し続けている高度情報化社会、情報ネットワークの構築によって進化する社会は、生活機器にも大きな変化を及ぼしている。機械や生活機器の電子化、ロボット技術を駆使した介護機器や医療機械の開発、情報システムに支えられた生活商品の流通システムの変化、携帯電話の普及に伴いインターネットによるバーチャルコミュニケーション文化の発展、電子マネーや金融システムの情報化による消費生活の変化、電信技術の進歩による世界規模の情報流通の加速的な拡大、デジタル映像技術の進歩によって映像産業に新ビジネスが登場、交通機関の自動振込み装置、銀行窓口の自動支払い、顧客情報のデータ分析から提案される新しいマーケティング、（光）ケーブルによる映像配信技術の発展とＩＰ電話の普及等々と、数えればきりのない数の技術が開発され利用されている。
- 情報ネットワーク社会化によって、生活はより便利になり、世界の情報がテレビやインターネットを通じて流れ、世界政治や経済の動きも茶の間にいながら知ることが出来る。インターネット文化は民主主義の社会の発展に貢献するという希望を与えている。インターネットによって、地理的条件に制約されないコミュニケーションが可能になり、同じ悩みを抱えた人々のデジタル会話が成立し、敏速な意見交換が行われ、短い時間での相互の意思疎通を可能にし、また意思決定までの時間を短縮することによって、意思決定に必要な労力を少なくした。情報化社会は、生活条件を改善し、生活維持に必要な生活時間を短縮し、余暇時間を増やすことに貢献した。また、その余暇の多様な可能性もインターネットによって爆発的に広がっている。
- しかし、過剰な情報、間違いだらけの情報、アダルト情報、犯罪事件に巻き込まれる情報も蔓延している。こうした情報は一方で表現の自由と言う名のもとに規制されることなく放置され、他方で、情報技術的に排除することが困難な理由で見逃されている。
- この情報化社会や生活情報を考えるとき、生活重視の生活学の視点を堅持する必要がある。生活者の生活条件を改善し、またより豊かな生活環境を構築する課題から考えるとき、情報の問題は、情報科学から生じるのではなく、人間コミュニケーションの課題から出発する。ことば、文字、表現、意味、記号など、これまで言語学や人間学が論及してきた課題が、生活情報論の課題の基本となる。人間とは何か、表現とは何か、というコミュニケーションの形成過程に立ち入って、情報の基本概念を問題

にする情報論、人間学としての生活情報論基礎が課題になる。

- 例えば、日常的な生活の現場で、起こるデマやうその情報のあり方を考え、それらが引き起こす日常生活、個人の生活への影響を考えるとき、この現実を些細なことであり、生活学の学問対象になり得ない事件として取り扱うことは出来ない。生活情報は、人間がことばを使い、道具を使い、集団生活を始め、決まりを創った時点（考古学的時間を前提にして）から存在していた。生活情報の基本構造を考えるためには、言語学、発生心理学、言語精神分析学、記号学の学問分野の理解が必要となる。

表2、生活情報学の課題の例

生活情報	ライフスタイル	心理	経済	法律	工学	政治	言語	健康	環境	交通	文化	福祉	娯楽	教育	美学	・	・
衣	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	・	・		・	・	・	・	An
食	B1	・															
住	C1		・							・							
家族	D1			・							・						
地域社会	E1				・							・					
こども	F1					・							・				
高齢者	G!						・							・			
障害者	H1							・							・		
安全、災害	I1								・							・	
・																	・

生活環境論の課題の例

- 生活環境は、家庭環境、生活文化環境、地域社会環境、生態文化環境、民族文化環境と生活者を取り巻く生活文化の空間的なカテゴリーによって異なる課題を提供している。
- 最近、住環境に危険が持ち上がっている。石綿を利用した住宅建材は、数知れないほど多い。30年以上前に環境問題や労働災害に取り組む団体や被害者患者の組織がこの問題を取り上げた。労働科学研究所や塵肺専門医師らからもアスベストによる塵肺（アスベスト塵肺）や癌（中皮腫）は指摘されていた。しかし、当時の労働省は対策を取らなかった。殆どの先進国が対策を取った後に、しかも数年遅れて、政府は対策に立ち上がった。その間の被害は、単に現在患者に対する救済問題のみではなく、アスベストを建材として使用した建造物への対策、それらの建造物を長年利用していた人々の今後の健康被害発生の問題、また撤去されたアスベストの処分や処理問題等、大きな課題が残されている。
- 足尾鉱毒事件、水俣病、カネミ醤油事件、四日市喘息などの例のように、環境問題は、生産効率や生産条件を生存条件に優先させる考え方から生み出される。環境汚染問題は年々深刻さを増し、特に地球温暖化による気象の変化、集中豪雨の多発、台風やハリケーンの発生頻度や進路の変化などが指摘されている。そして、すでにヨーロッパでは70年代から酸性雨によって森林が消滅し、湖の魚類が死滅した歴史を持っているが、中国や韓国の大気汚染物質による酸性雨の増加は、今後の日本の生態系に大きな影響を与えることは確かである。こうした生活環境の一部である生態環境の汚染問題を取り上げる生活学は、この問題の解決に有効な知を提案しなければならないだろう。
- これまでの社会は生産条件の向上を、社会の豊かさの指針としてきた。しかし、環境問題はこの産業中心主義や商業経済活動中心主義と生活重視の考え方が必ずしも一致しないことを示した。生活重視

の考え方には生存条件を向上するという視点がある。経済的に豊かであることは大切な生存条件であるが、経済要素として計量されない水、空気、光などは生存するために絶対的に必要なものである。これまで自然物として、社会生産過程の中でも安価な資源、無限に存在し、それらの資源の枯渇やまた劣化を考慮に入れる必要がないものが、今、生活資源として理解されるようになってきた。そして生態環境の保全のために、生活廃棄物の処理技術やそれを資源として活用し廃棄量を減らす対策が検討されている。

- 70年代の石油危機以来、日本では省エネルギー対策を取り、新技術の開発も進んだ。しかし、年間の二酸化炭素の排出量は年々増加している。京都議定書に定めた排出量の目標限度をはるかに超えようとしている。そのことは、化石燃料の枯渇の進行を意味する。資源の枯渇は石油のみでなく、金属資源、水産資源、森林資源や水資源など生活に直接必要な資源が含まれている。クリーンなエネルギー資源の開発技術、省エネルギー住宅、資源ごみのリサイクルなどの課題が取り組まれている。
- 生存環境条件と向上する環境生活学の課題は、環境保護と同時に持続可能な循環型社会の創設を問題にしている。
- 持続可能な社会の課題、つまり生存環境の再生産問題は、産業生産資源のみではない。人間という資源の再生産問題、人的資源と呼ばれる人材の再利用課題、すでに2007年問題でこれらの課題への具体的な対策が求められているのであるが、総じて生活資源の再利用によって生活経済の総コストを少なくする課題は、現在の生活経営の大切な課題である。持続可能な社会を課題にして、生活経営、福祉、育児、地域社会、ライフスタイル、教育、都市計画、消費者問題、生活関連産業、流通等々の課題が問われている。

表3、生活環境学の課題の例

生活環境	ライフスタイル	心理	経済	法律	工学	政治	都市	健康	情報	交通	文化	福祉	娯楽	教育	美学	農業	・
衣	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	・	・		・	・	・	・	An
食	B1	・															
住	C1		・							・							
家族	D1			・							・						
地域社会	E1				・							・					
こども	F1					・							・				
高齢者	G!						・							・			
障害者	H1							・							・		
安全、災害	I1								・							・	
・																	・

多文化共生生活文化論の課題の例

- ２１世紀の日本社会は急激な国際化社会に向かうだろう。すでにヨーロッパの国々がそうであるように、国内で生活する外国人の割合は増える。また国外で生活する日本人の割合も増える。日本の生活環境が国際化することによってアメリカ社会で見られた多文化共生社会が登場する事になる。
- 多文化共生社会とは、単に地域社会に外国人が居るという受身の状況ではなく、国際結婚、異文化家庭環境で育つ子供、外国人の子供たちがいる小学校や地域社会が登場することを意味する。その社会

は日本文化や日本社会に肯定的なインパクトを与えるのもだけではなく、否定的な課題も投げかける。

- 例えば、今日の日本では、外国人による犯罪が次第に増加し、今までにない犯罪パターンが横行することになる。犯罪パターンも文化的な側面を持つため、新しい犯罪手口に日本人たちはカルチャーショックを受けることになる。そのリアクションが、多文化共生のイメージを壊していく。
- こうした問題を解決するためには、地域社会が　多文化の隣人を受け入れ、それらの人々を自治会や地域共同体に参加させ、近所付き合いを行い、家族間の人間関係を作る必要がある。このように、国際化に伴い日本社会の生活環境は著しい勢いで変化している。それらの変化に対応するために生活学は国際生活の課題を取り入れているだろうか。また、多文化共生社会における生活者の生活様式について調査や研究を進めているのだろうか。
- 国際化する日本社会で問われるのは、伝統的な生活文化に対する深い理解を推進し援助する教育や生活環境である。何故なら、伝統的な生活文化への深い理解を土台にすることで、異文化生活様式の素晴らしい側面を積極的に取り入れるライフスタイルが必要となる。「自文化理解」の文化が異文化理解を進める生活者のライフスタイルを形成するからである。日本文化への理解を深めることによって、より深く国際社会の異文化を理解する精神的土壌が形成されるのだが、そうした生活文化を育てる環境を持っているかを問いかけ必要がある。
- 国際化する日本社会では、情報ネットワークによってバーチャル空間でのコミュニケーションが可能になり、生身の人間間のコミュニケーションが希薄になる。共同体が崩壊するのは、個人主義のライフスタイルを代表する都市文化が原因となるばかりではなく、生活者のコミュニケーション力の喪失も挙げられる。こうした問題の解決は、家族関係のあり方、家庭教育や学校教育の問題、地域社会でのコミュニケーション作り方、イベントへの参加のさせ方などを検討し改善し、機会を多く作り、少年少女や青年達に呼びかける地域活動が必要である。それらの地域活動を支持する生活文化環境が問題になる。

生活資源の構成要素と学際的生活学

生活世界の構成要素

- 問題解決の学際的科学として生活学は展開する。その学際的生活科学論を構成する概念として、生活資源の四肢構成要素を提案する。
- 生活学における、生活主体と生活環境（生活空間）の概念を定義するための基本公理は、その二つの要素が相互に関係して成立しているという現実認識である。つまり、生活主体は生活環境に作られ、生活環境は生活主体に作られる関係がある。生活主体は生活環境に規定され、その自我や精神構造の基本を創る。されに生活主体は生活環境を再生産し、通時的に変化しつづける時代や文化に適した形態に改良し、変革する。生活主体と生活環境の関係は、相補的二元論の関係にある。
- 一般に生活空間の環境や主体の基本構成要素を素材と様式に分類することが出来る。素材とは物質エネルギーによって創られたものを前提として生活資材や生活者の身体を構成する要素である。様式とは社会規範、モラル、精神抑制機能、決まり、神経生理学的規則や身体を構成する遺伝子情報に至るまで、社会的行為、個人的行動、身体的反応を決定する規則一般を意味する。
- 二つの軸、空間的分類と構成的分類を設定する。空間的に分類される二つの要素とは、生活主体（身体と精神で内的要素）と生活環境（身体と精神を取り巻く世界で外的要素）であり、構成的に分類される二つの要素とは、様式と素材である。この二つの分類軸の中に四つの構成要素が表現される。生活主体（身体と精神で内的要素）の様式と素材、生活環境（身体と精神を取り巻く世界での外的要素）の様

式と素材である。生活主体の様式を内的様式と呼び、心身の活動形態を示す.生活主体の素材を内的素材と呼び、心身の構成形態を意味する。また、生活環境の様式を外的様式と呼び、生活環境の活動形態を示す。そして、生活環境の素材を外的素材と呼び、生活環境の構成要素を意味する。

表4、生活資源の構成

生活資源	生活素材	生活様式
外的要素	生活素材の外的要素 生活環境の構成要素	生活様式の外的要素 生活環境の活動形態
内的要素	生活素材の内的要素 心身の構成形態	生活様式の内的要素 心身の活動形態

生活世界の設計構成

- 四つの基本要素の相補的関係によって生活資源は成り立つ。生活環境と生活主体の相互関係が成立したように、生活素材は生活様式によって生み出され、生活様式は生活素材に規定されるという、素材と様式の相互関係がある。生活環境、生活主体、生活要素、生活素材からなる四要素の不可分の関係によって作り出されている世界が生活世界である。言い換えると、生活世界は、生活資源の要素によって設計された資源形態であるといえる。
- 外的生活素材のプログラム要素は、生活環境の素材を構成している設計要素を意味する。例えば、建材は、住宅や建造物を建てるための材料を構成する複数の要素によって構成されている。その建築材料を構成する複数の物質的な要素、石材、セメント、化学合成物質などによって構成、デザインされた物質が、外的生活素材のプログラム要素であると考える。内的生活素材のプログラム要素とは、生活主体の身体的心理的機能を生み出している身体的な設計要素を意味する。例えば、建材に関する身体的な認識や情報を蓄積している脳神経系の複数のシナップス回路、建材を生産するための操作を実現する感覚器官、筋肉など、その行為を生み出す複数の身体器官の構成を内的生活素材のプログラム要素と考える。
- さらに、外的生活様式のプログラム要素の意味は、生活環境の様式を構成する設計要素である。建材の例をとって説明するなら、ある特定の建材の製造工程を実現する生産ラインの操作方法、建材使用の決まり、マニュアルなど建材製造、加工、技能などの知識や情報を意味する。また、内的生活様式のプログラム要素とは、生活主体の様式を構成する設計要素であり、建材の例に従えば、建材を生産するための行為を生み出す感覚器官や筋肉などの身体運動の決まりを意味する。身体運動としての操作技能や技は、内的生活様式のプログラムによって生み出されたものであるといえる。
- 生活資源の設計するプログラムは、四つのプログラム要素によって構成された設計構造をもつ。建材の例を取れば、建材は、素材を構成する複数の物質（外的生活素材のプログラム要素）によって、仮に自動化された工場であっても人に製造されている（内的生活素材と内的生活様式のプログラム複合要素）。その素材の材料の質的なまたは量的な選択によって、素材の性質を決定し変化させることが出来る。それらの知識は、素材物性の決定に関する情報や技術は企業の特許や製造方法として、生産システムを決定する要素となる。この場合も、行為を決定している内的生活様式のプログラム要素と製造工程や特許などの外的生活様式のプログラム要素と複合形態を取る。生活行為は、生活資源の加工、消費、再生産を意味するため、その情報構造も、認識、評価、指示の形態を持つ。それらの生活資源のあり方、つまり設計構造がプログラムと呼ばれている。

表5、生活資源のプログラム構造

生活資源	生活素材	生活様式
外的要素	外的生活素材のプログラム要素 生活環境の構成素材に関する設計要素	外的生活様式のプログラム要素 生活環境の活動様式の設計要素
内的要素	内的生活素材のプログラム要素 心身の構成素材に関する設計要素	内的生活様式のプログラム要素 心身の活動様式の設計要素

問題解決のための解釈方法・発生学的生活資源論

- 阪神淡路大震災時に必要とされた生活情報論の調査と生活情報の危機管理を作り出すための理論的な背景を構築するために、生活構造論や生活システム論の学説を検討した。その作業の中で、生活情報史観の仮説を立て、生活情報の発生論的な解釈を試みた。生活情報と「吉田・ウィンナーの情報の定義」に照らし合わせて、「生活資源のパターン」と解釈した。生活資源の解釈も、生活情報の発生論的な解釈の延長線に載せて、理解することが出来る。その考えを「生活資源史観」と呼ぶことにした。
- 簡単にその結論を述べると、生命を維持するための一次生活構造に規定される生活資源を一次生活資源、豊かな生活を形成するための二次生活構造に規定される生活資源を二次資源、余暇を楽しむための三次生活構造に規定される生活資源を三次生活資源と定義することにした。そして、それらの生活資源は、人間が生活行為を始めたときから存在した。歴史社会での生活構造の進化は、それらの資源の量的関係によって決定されると考えた。唯物論的な「生活素材が生活様式を決定する」という公理から導かれる歴史主義的な解釈は「生活資源史観」では、否定される。むしろ、ジンメルなどの歴史観に近い解釈である。
- 一次生活資源は一次生活素材と一次生活様式からなり、一次生活素材は、内的一次生活素材と外的一次生活素材から構成される。また、一次生活様式も内的一次生活様式と外的一次生活様式から作られている。次に、二次生活資源は、二次生活素材と二次生活様式ならなり、二次生活素材は、内的二次生活素材と外的二次生活素材から構成される。また、二次生活様式も内的二次生活様式と外的二次生活様式から作られている。さらに、三次生活資源は、三次生活素材と三次生活様式ならなり、三次生活素材は、内的三次生活素材と外的三次生活素材から構成される。また、三次生活様式も内的三次生活様式と外的三次生活様式から作られている。
- 以上の生活資源を構成する要素を１２のカテゴリーにまとめる。

表6、生活資源要素の発生的構造とその定義

生活資源	生活素材		生活様式	
	内的要素	外的要素	内的要素	外的要素
一次生活資源	内的一次生活素材	外的一次生活素材	内的一次生活様式	外的一次生活様式
二次生活資源	内的二次生活素材	外的二次生活素材	内的二次生活様式	外的二次生活様式
三次生活資源	内的三次生活素材	外的三次生活素材	内的三次生活様式	外的三次生活様式

生活資源の発生的構造から解釈される生活学の学際的構成

- 生活学は、生活資源を分析し改良する問題解決の学である。生活資源の要素やそのプログラム的構成要素をより分析的に、より正確に理解することによって、生活世界を改良する技術、力となる。生活資源のプログラム構造を理解する作業が、具体的な生活学の課題となる。生活素材を研究する分野は、生活科学として発展してきた分野である。被服材料学、食品学、栄養学、建築材料学、一般に言われている生活資学の内容は、生活素材に関する課題を扱っている。木、紙、プラスチィク、鉄、陶器等々。資源を構成している人工物の物理的、化学的、医学的、生態学的な性質を分析し、より生活に便利で、

安全なものに改良するための研究を生活資源の外的要素に関する研究と呼ぶ。それらは、生活学の中の大きな分野をして発展してきている。

- また、生活主体を構成している生物体としての身体と精神構造に関する課題は、生活素材や生活様式の内的要素に関する研究と呼ぶことができる。その研究は、これまで発展してきた医学、生物学、生物化学、心理学や精神分析学の成果を援用し、家庭医学、家族関係などの研究に活用する。この分野の研究を、生活資源の内的要素の研究と呼ぶことにする。
- 生活資源の外的要素に関する研究では、生活環境に関する課題、衣食住環境や生態系での生活環境の課題を議論する。現在、地球温暖化や生態系の危機的な状況が、生活環境に直接影響を与えようとしている。生産活動のあり方のみでなく、生活スタイルを考え直し、地球環境の保全を課題にしたライフスタイルを確立する必要がある。例えば、生活学の食生活文化の課題として、廃棄された食材の生態系での化学分解や生物食物連鎖の実態を調査し、よりよい、食生活文化を考える必要がある。こうした課題も、今後、生活学の課題として取り上げられるだろう。
- 生活様式の課題は、これまで、文化人類学、社会学、経済学が社会文化システムのあり方として取り上げられてきた。例えば、風習、規範、規則、習慣、法律、貨幣の単位、国際関係などである。生活環境や社会経済のシステムや知的活動を維持するための規則を、一般的に生活様式と考える。
- 高度に発展していく科学技術文明社会では、それらの近代科学思想を背景にした観念形態によって生活様式が生み出されてきた。この新たな文明と文化の生活様式を理解するために、科学認識論、科学史、科学技術論などで理解された科学技術文明社会のパラダイム構造を生活学の課題に取り入れる必要が生じている。これまで、道具の生活学、つまり、生活道具や生活技術に関する研究があり、巧みの技、技能、技術、道具の使い方、などが調査されてきたのであるが、今後、科学的とか合理的と呼ばれる考え方、判断の仕方、価値観を、生活様式論の中でも課題にする必要が生まれるだろう。
- 生活学は生活文化に関する学問である。生活文化の変遷が、この学問のあり方を方向付ける。例えば、日本社会では、国際化による生活環境の著しい変化が起ころうとしている。これからの生活学の課題の中に、新たに多文化共生社会での生活様式を学ぶ課題が登場するだろう。この課題は、同時に、日本の生活文化が、これまでの伝統的な生活スタイルに対する深い理解を必要としていることを意味している。
- 文化の変遷に伴う、生活環境の改良を課題にしながら、生活学は発展してきた。生活学の伝統的な学習内容が、新しい生活課題によって変革される。国外でも国内でも、大学での生活学教育は、敏感にその課題をキャッチし、教育のあり方を変革してきた。現在、日本では、国際生活文化と、伝統的な生活文化の学習課題を加え、時代的な生活文化の変化に対応できる異文化理解という教育内容が検討されようとしている。
- 表6に示した生活生活資源要素の発生的構造のモデルに従って、生活学を構成する学際的要素に概念と考えられる学問分野を表7に示す。

表7、課題別の生活学の学際的分野

生活資源	生活素材・様式			
	内的要素		外的要素	研究分野名
一次生活資源	最低限必要な精神環境やこころの生活習慣病、生活病理的現象の分析	精神分析学 発達心理学 親子関係論 児童心理学 精神病理学 言語学	生活に必要な衣食住と健康に関する分析 現在の生活科学の領域に渉る分野	食物学 栄養学 被服学 住生活学 家庭医学 人間生態学 生活習慣病理学
二次生活資源	社会的により豊かな精神生活をおくるための社会倫理、教育や教養などに関する要素の分析	育児論 家庭環境論 性生活論 女性学 人間関係論 地域社会論	便利な生活用品や健康的な生活を維持する生活環境、衣食住、医療、地域社会、生態環境、生活設計、家族計画、生活経営などに関する分析 現在、生活学の中心を担う学問分野	生活環境生態論 服装デザイン 住居デザイン 食文化論 被服文化論 住居生活文化論 組織論 家族計画論 家庭機器論 生活情報処理論 家庭経営論 リサイクル論 消費者論 国際生活文化論 科学技術文明論
三次生活資源	自己の欲望を充たすための異常な生活行動の分析とその治療と社会的に認められた自己実現の方法や技術に関する分析	宗教学 哲学 生活思想 生活倫理	生涯学習センター、生き甲斐や趣味のサークル、ボランティア、レジャーランド、映画館、テレクラ等、遊び、趣味などを充たす社会的な文化的な制度に関する分析 最近の生活学の中で注目されている分野	レジャー論 生涯教育論 ボランティア論 遊びの文化論 遊びの社会経済学 余暇生活論

生活世界の個別課題に含まれる学際的テーマ

- こころの問題を解明するためには、生活学では、臨床心理カウンセラーや精神分析のみではなく、心身全体の健康管理を家庭や地域の生活文化環境を改善すること取り組むことが提案されている。より良い精神生活を送るための知識や技術を学び、生き方を考え、楽しく生きるための知恵を身につける。ライフスタイルや生活環境の改善するための知識や技能を修得しながら、生活病理を全体的に解決にする方法が、生活学のやり方である。
- これらの学際的な課題は、表7を応用し、こころに関する課題について問題を取り上げることで、表8に示すように、学際的研究課題が提案できる。

表8、こころの生活病理に対する学際的生活学の課題

生活資源	生活素材・様式			
	内的要素	研究分野の例	外的要素	研究分野の例
一次生活資源	精神環境やこころの生活習慣病、生活病理的現象の分析	精神分析学 発達心理学	精神的な健康を維持する生活環境の課題	家庭医学 生活習慣病理学
二次生活資源	社会的により豊かな精神生活をおくるためのライフスタイルの課題	育児論 家庭環境論 人間関係論	健全な精神生活を維持するための生活環境に関する課題	生活環境論 生活文化論
三次生活資源	自己実現の方法や技術に関する分析	生活思想 生活倫理	有意義に余暇生活を送るための社会文化的な環境に関する課題	ボランティア論 余暇生活論

まとめ

1. 生活学は問題解決のための学問である。その科学は、生活学化をテーマにした学問分野との学際的研究の課題を共同で展開する。
2. プログラム科学論が問題解決学の科学論に位置する。具体的な事例の研究を通じて、その有効性を検証しながら、生活学は発展し、その科学方法論としてプログラム科学論が確立していく。

引用と参考

- 三石博行、「生活重視の思想に基づく生活世界の科学性の成立条件」in 『研究報告書』、第38集、大阪短期大学協会　pp64-71
- 三石博行、「生活情報の構造とその文化形態」、pp62-73 in 片方善治監修 『 -情報文化学会創立10年記念出版- 情報文化ハンドブック』、森北出版株式会社、p62-73、
- 三石博行、「設計科学としての生活学の構築- プログラム科学としての生活学の構図に向けて- 」in 『金蘭短期大学研究誌』、第33号、大阪、pp1-40、ISSN 0287-0487
- 吉田民人、　「近代科学のパラダイム・シフト　－進化史的「情報」概念の構築と「プログラム科学」の提唱－　平成8年度学術研究総合調査報告書　pp266-282
- 吉田民人、「新科学論の視座と哲学の視座　－経営哲学およびその方法的基盤をめぐって－」　経営哲学学会　『経営哲学とは何か』文眞堂、2003、pp188-207
- 吉田民人、「新しい学術体系」の必要性と可能性　『学術の動向』（日本学術会議広報誌）2001.12,
- 吉田民人、「大文字の第二次科学革命－情報論的転回－」　国際システム研究会連合　基調報告、2005.11（予定）
- 東京都立短期大学の都市生活学科のホームページ（http://www.tmca.ac.jp/toshi_seikatsu/）